

近大薬総研がハイテク整備事業開始

近畿大学薬学総合研究所・薬学研究科は、本年度から補完代替医療素材の科学的評価と、その機能性成分をシースとする難治性疾患治療薬の創製を目的として、ハイテク・リサーチ・センター整備事業をスタートさせる。同事業は、欧米に比べて立ち遅れ気味のわが国の補完代替医療普及や、難治性疾患の

医薬品シースを探究する実用的な研究の推進が大きな特徴となっている。また、困難とされる世界各地の伝統・伝承薬や薬用食品の収集には、近畿大学が培ってきた現地大学・研究機関などとのネットワークをフル活用することにより、今後の研究成果が期待される。

創薬への応用も目指す

代替医療素材を科学的に評価



村岡 教授

高齢化社会の進展に伴い、セルフメディケーションがより重要視されるようになってきた。わが国でも健康食品やサプリメントなどへの関心は年々高まっているが、欧米諸国では既に1990年代初頭から、補完医療や代替医療に用いるハーブ類を中心に、有効性を科学的に証明する機運が

上昇。新たに医薬品としてイチョウ葉エキスやブルーベリーエキスなどのエキス製剤が認められるようになった。さらに、現代西洋医学(通常医療)と補完代替医療を組み合わせることで、とりわけ癌をはじめとする難治性疾患に対して、相補的に治療を行う統合医療の概念も誕生している。

一方、日本では、最近になってようやく、補完代替医療を「現代西洋医学領域において、科学的未検証及び臨床未応用の医学・医療体系の総称」と定義し、その

開始されるようになった。01年には、特定の優れた機能をもつ食品を特定保健食品、一定の機能を有する食品が栄養機能食品に分類されるなど、食品については一定の評価が加えられている。

このような状況の中、近畿大学薬学総合研究所・薬学研究科のハイテク・リサーチ・センター整備事業では、世界各地で食用に供され、機能を持つとされている食品、ハーブ、天然物について、その機能を科学的に評価し、機能を発現する分子(機能性分子)を探索・特定することにしてい

る。さらに、薬学研究科と連携して、それらの体内動態や既存医薬品との相互作用なども含めた物質科学的な解明も推進。機能性食品中の機能性分子の網羅的定量化法の確立や、見出された機能性分子を医薬品シースとした、癌、生活習慣病をはじめとする難治性疾患の治療のための創薬研究を進める予定だ。

研究組織代表者の村岡修近畿大学薬学部教授は「総合大学である近畿大学の特徴を生かして、医学部や今春からスタートしたアンチエイジングセンターなどと連携することで、本事業で得られた研究成果をより実用的なものにしたい。また、薬学だけではできない研究領域にもどんどん踏み込んでいきたい」と抱負を語る。

近畿大学では、05年4月に薬学総合研究所内に食品薬学研究室を創設。食経験を有する機能性素材を世界に求め、これらについて薬学的見地から総合的な研究を展開している。また、世

物や薬用食品の収集には、中国の中国薬科大学や瀋陽薬科大学、タイ国のラジャマシカラ工科大学など、これまで近畿大学が培ってきた現地大学や研究機関とのネットワークをフルに活用して、探索研究を進めている。

村岡教授は、「イギリスのハーブ局方のように、信頼性の高い補完代替医療素材の評価が確立されるものと期待している。その機能成分をシースとする難治性疾患治療薬の創製にもつな

ぎたい」と、期待を寄せている。

頭つうはいた神経痛の
ケロリン
この医薬品は使用上の注意を必ず読んで正しく使うよう指導下さい。
内外薬品